

「ただひたすらに咲く花であれ」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 百花春至って誰が為にか開く

4月1日、これまでお世話になった方々のうち数人の方がここを離れ、職場を変われました。別にもう会えなくなるわけではないですが、やはり淋しいものです。それでも、それと同時にここは別の場所で働いておられた方が私たち教職員の仲間に加わってくれました。新たな出会い、それはとても心躍るものです。

転出等をされる方々		転入される方々	
名前	新しい職場	名前	これまでの職場
—	—	白鷹 正樹 教頭	夢野台高等学校
前川 克彦 事務長	和田山高等学校	上村 晃代 事務長	加古川東高等学校
篠倉 利典 教諭	豊岡高等学校 教頭	森岡 礼次 教諭	夢野台高等学校
田中 基 教諭	退職→本校時間講師	大和 智子 教諭	御影高等学校
能島 秀邦 教諭	退職	永井 伸哉 教諭	夢野台高等学校
片山 貴夫 教諭	明石北高等学校	中山 拓也 主幹教諭	長田高等学校
岩田 正人 教諭	芦屋特別支援学校	百濟 正人 教諭	御影高等学校
潮海 香代 教諭	川西緑台高等学校	田島 亜希 教諭	神戸鈴蘭台高等学校
中井 一弘 教諭	夢野台高等学校	中山 美理 教諭	神戸鈴蘭台高等学校
木村 真一 教諭	明石高等学校	向井 留衣 教諭	東灘高等学校
中川 隆二 教諭	長田高等学校	鏡田 良太 教諭	神戸高塚高等学校
小林 直美 教諭	星陵高等学校	久保 夏織 教諭	武庫荘総合高等学校
大久 孔明 教諭	県教委 高校教育課	西田 悟士 教諭	北神戸総合高等学校
上原 励 教諭	御影高等学校	大中 秀悟 教諭	国際高等学校
石田 延広 教諭	星陵高等学校	高田 南 教諭	上郡高等学校
佐野 正明 講師	仁川学院	溝口 陸 教諭	加古川南高等学校
前田 里奈 講師	西宮高等学校	柏井茉里奈 副主任	県教委 総務課
富岡 啓子 事務員	御影高等学校	田野和加子 事務員	尼崎工業高等学校

令和8年度は教頭先生がひとり増え、ふたりとなります。これは私が校長協会等の役割が増え、学校を不在にすることが多くなるためのご配慮です。有り難いことです。

とは言え、それは淋しいことでもあります。教師にとって、生徒の皆さんの輝きを間近で見られることに勝る喜びなど存在しませんからね。

こうした春の日に、私が思い起こすことにしているのはタイトルに掲げた「百花春至為誰開」という禅語です。

花はあくまで自身のために花を開きます。自身の成長のため、あるいは次世代に生命を繋ぐため、無心に花を開きます。それでも花が作りだす蜜に鳥や虫は集まり、私たち人間の心はやわらかく和みます。ただ自分自身の生を生きるように、ひたすらに咲くことが周りに集うものをより活かしているのですね。

しかし、私たち人間は無心には生きられないですよ。好き嫌いがあります。損得を考えたりもします。怒りにまかせ他者を傷つけることもあります。自分がやるべきことに一心に向き合えばよいのに、そうはできない人の心を戒める言葉、それが「百花春至って誰が為にか開く」なのです。だから私も愚痴や不満は口にせず、限られた時間を一心に楽しもうと考えています。昨年度2学期の終業式、私の理想について話をしましたね。振り返りとしてその時の通信を添えておきます。読んでいただくと嬉しいです。

さあ、まもなく新しい1年。春休み、いい助走になりましたか？ ラグビー部はいい助走をしましたね。埼玉県熊谷市で開催された第27回全国高等学校選抜ラグビーフットボール大会への出場。西岡先生が企画してくれたパブリックビューイングは生徒の皆さんの応援と元ラガーでもある能島先生、吉岡教頭先生の解説で大いに盛り上がったそうです。でも、居ても立ってもいられない私は熊谷へ。降りしきる雨の中、多くの保護者、ラグビー部OBの方々の声援を受け、秋田工業高校や長崎北陽台高校といった全国大会常連校に力及ばずとはなりましたが、最後の最後までしっかりと立ち向かう姿は胸を打つものがありました。

そう言えば壮行会でキャプテンの後藤聡志くんは全校生に誓ってくれましたね。「身体の大きさでは勝てませんが、身体を張るひたむきさは負けません」 有言実行。ラグビー部員は私たちにも勇気を与える見事な咲きっぷりでした。本当にありがとう。



「理想の自分」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 冬が訪れてから気づいたこと

朝の通勤時、地獄坂から見上げると青空の下に私達の校舎は聳えています。それは趣があり、心惹かれる風景です。それでも冬の訪れとともに気付いたことがあります。4階の教室の窓がすべて開いているのです。気になってお聞きすると、榎本先生が毎朝開けてくださっているとのこと。風通しの良い、清涼な空間を創ろうという心配りですね。

「自分にもできること」にこだわりながら、最近の私は生きています。だから余計に榎本先生のさりげない振る舞いが心に残ったのかもしれない。そうそう、3学期の始業式の式辞で話した私と叔父との話も「自分にもできること」のひとつです。子どもがいないためかもしれませんが、叔父夫婦は昔から私をとっても可愛がってくれました。その叔父が昨年にも奥さんを亡くし、1人でクリスマスを迎えると聞いたので、叔母を偲ぶ時間をともにしたのです。いわば叔父叔母孝行ですかね。

それにしても穏やかな1月でした。おそらく終業式の余韻のせいです。生徒の皆さんは実にいい表情で私の話を聴いてくれましたし、あの日の校歌は私がこれまで聴いたことのないような響き方で講堂を揺るがせました。ピアノ伴奏の能島先生も「こんなに歌ってくれたのは初めてですよ」って驚いていましたからね。そうそう、あの日の私は画像をスクリーンいっぱい貼り付け、こんな話をさせてもらいました。



薔薇は向日葵になれないし、向日葵は薔薇になれない

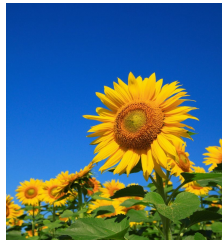
～ A rose can never be a sunflower, and a sunflower can never be a rose.

これはオーストラリア出身のファッションモデル、ミランダ・カーの言葉です。日本語に訳すと、「バラは決してひまわりになれないし、ひまわりは決してバラになれない。すべての花はそれぞれで美しい」となります。



憧れの存在ってありますよね。でも、その通りになるのは難しいことです。バラはバラだし、ひまわりはひまわりでしかありません。だからこそ、それぞれが持っているものを意識して、それを活かして勝負しないといけないのかなと思っています。誰かの見よう見まねでは、本物にはなれないということですね。

ちなみに「わがまま放題の先生」だった僕が少し変わったのは先輩に叱られた30歳のときです。「しっかりしろ、あんたは桜なんだから」そう言われました。開花を待ち焦がれられ、散るのを惜しまれる。それが桜だそうです。「良くも悪くも、あんたは周りの人間が気になってしまう目立つ存在や。だから、調子がいいからっていい気になったり、わるい時には不機嫌な顔をしたり拗ねたり、そんな素振りを生徒に見せるな。生徒がそんな姿を正しい大人の姿と勘違いしたら、どうする。そう伝えるのがあんたのしたいことか」と。



これが結構こたえたんです。それで、それからは僕も人前でどのように振る舞うべきか考えるようになりました。さあ、自分らしさって何処にあるんだろう、そんなことを考えてくれたら嬉しいなって思います。自分の良さは何処にあるんだろうって。

例えば山で見る杉は凄いですね。まっすぐまっすぐ上へと伸びている。とても美しい姿です。あんな自分であれば嬉しいけど、どうも自分には難しそうです。だからどうせ桜なら、醜い桜にはならないように生きればいいのかって今は思っています。

いつだって比べるべき相手は隣の誰かさんではありません。理想の自分です。その差を埋めることにこそ、若いうちに手をつけましょうか、ということをお願いして僕からの話とします。それではよいお年を。

78回生は今、悩み多き時期ですか。でも、前に伝えましたね。「積み重ねてきた過去と果たすべき未来を君が解っていればそれでいい」と。理想の自分を見失わなければ道は拓けていくと、私は信じているのです。